

日本教育社会学会若手研究セミナーの記録

※原則として、過去に学会ホームページならびにブリテンにて紹介された記事を、そのまま用いて作成しています。

第1回

日時：2013年3月10日～11日

場所：立教大学

2013年3月10、11日の2日間にわたって、立教大学を会場として、初めての日本教育社会学会「若手研究セミナー」が開催されました。20代から50代までの幅広い年齢層、また広島から筑波に至る広い範囲から、大学院生や非常勤講師の方など30名余のご参加をいただきました。講師の先生方のご尽力や事務局の頑張りもあり、参加者からも大変好評でした。お礼申し上げます。

次年度以降も開催について今後検討したいと思っておりますので、今回参加できなかった方はぜひHPやブリテンのチェックをお忘れなくお願いいたします。

事務局長 古賀正義



【会長からのご挨拶】

日本教育社会学会若手研究セミナーの開催にあたって

3月10日、11日の2日間、立教大学を会場として日本教育社会学会若手研究セミナーを開催しました。その趣旨は、さまざまな大学・大学院において教育社会学研究の研鑽を積んでいる若手研究者を対象に、日本教育社会学会としてセミナーを開催し、教育社会学の最新の知識の習得を目指すとともに交流を深め、参加者相互の新たなネットワークの構築を図るということです。

セミナー開催にいたる発端は、企画部からの報告書「教育社会学教育のあり方について」(2012年6月)に遡ります。この報告書では、個々の大学院では十分に提供できないスキルや情報を得る機会を、学会として提供していくことは有意義だとして、①多様なセミナーの開催、②研究関連の情報の提供、③地区別の活動の活性化、④その他(年配会員による大学院生向け講演会、学会員によるSNSを通じた掲示板の立ち上げなど)、を提案しています。同時に企画部は、若手会員や院生会員に対する研究支援のためのニーズ調査を行い、そこからは比較的ニーズの高いセミナーや講習会として、中級以上の量的分析手法に関するもの、英語論文の書き方、中級以上の質的研究手法に関するもの、等があることを指摘しています。

この報告書を受けて、事務局は平成24学会年度内にセミナーを開催する予定であることを同志社大学で開催された大会時の理事会において公表し、その後、いつ、どこで、どのような内容のセミナーを開催するかを事務局内で話しあってきました。そして、事務局内の若手メンバーの意見を尊重し、今回は学会の中心で活躍されている方々の講演と、ワークショップを行うこととし、2日間の日程で開催することにしました。また、受益者負担の原則から参加料を徴収して、セミナーを運営することにしました。

今回は「とりあえず」の第1回です。開催場所、プログラム、運営方法など、いろいろな企画が想定されます。講師として登壇していただいた竹内洋先生からは、今回くらいの人数なら関西でもできるのではないかとのご意見を伺いました。また、セミナーの内容については企画部からの報告にもあるような調査手法に関するものや、他の学会で行っているような若手会員の発表を軸に据えるというようなことも考えられます。また、今回のセミナーは事務局が中心となって動いたのですが、今の体制では「第2回」「第3回」と続けていくことは容易でないようにも感じています。セミナーを始めとして、「教育社会学教育」を任務とするようなセクションが必要なのではないかと考えています。

最後になりましたが、今回のセミナーにおいて講師をお引き受けいただいた竹内洋先生、油布佐和子、本田由紀、古賀正義の各先生、ワークショップのファシリテーターお願いした

西島央、岡本智周、濱中淳子、浜野隆の各先生、そしてプログラムの企画から運営に至るまで献身的に働いていただいた事務局員の高橋靖幸、山田鋭生、富田知世、日下田岳史の各氏に厚く御礼申し上げたいと思います。

日本教育社会学会会長 加野芳正

【セミナー参加者の声】

日本教育社会学会若手研究セミナーに参加して

今回は、各大学の大学院生をはじめとして、現場で教職に就く方々など、約30名余りの方々にご参加いただきました。事務局としては、3月の中旬の時期の、東京の立教大学を会場として行いました今回のセミナーを一つの試金石ととらえ、参加者のご意見を参考にしながら、今後一層よりよいものにしていきたいと思っております。

以下、参加していただいた方のアンケートへの回答を一部ご紹介いたします。

Q セミナーに参加してみてもいかがでしたか。そのように感じる理由も書いて下さい。

大変よかった15名、かなりよかった5名、よくなかった0名

理由

- ✓ 今先端に行く先生方のお話をきけてとても刺激を受けました。(40代、大学非常勤講師兼大学院生)
- ✓ 少人数で著名な先生の話聞いたので。(30代、非常勤)
- ✓ 普通直接おはなしをうかがうことができない先生方の「研究」のお話を聞くことができたので。(30代、非常勤)
- ✓ 自分の研究テーマに関わる話題があったため。(30代、大学院生)
- ✓ 普段直接お話しをする機会のない先生方から貴重なお話を聞いた。(20代、大学院生)
- ✓ 1日目の講演・懇親会、2日目の調査法がとてもよかった。研究の方向性を確認できた。(50代、非常勤講師)
- ✓ 勉強になりました。教育社会学に特化した話が聞けてよかったです。(30代、助教)
- ✓ 所属大学内では得られないものがありました。非会員ですが、非常勤の方や博士後期の方との2日間にわたる交流は、貴重・希少なものだと思います。(年齢不明、大学院生)
- ✓ 講演とワークショップが組み合わされていてよかった。他大学の学生や教員の方の意見が聞けて自分の研究に役立った。視野を広げる機会となった。(40代院生)

- ✓ 若手研究者の知人ができた。(20代、大学院生)
- ✓ 尊敬する先生方の講演が聞けたこと、同じ研究関心や研究悩みを持っている院生とのコミュニケーションができたこと。(20代、院生)
- ✓ セミナーの人数規模が小さく、じっくりと参加者・講師の先生方と交流することができた。(30代、非常勤講師)
- ✓ 普段接点のない方々と交流する機会を頂き、自分の立場の再確認ができた。(20代、大学院生)
- ✓ 研究の最前線を知ることができた。講師の先生方が「今」考えていることを率直に話されていたので、とても刺激を受けた。(20代、大学院生)
- ✓ 1日目にワークショップを行う方が、その後の交流が深まるきっかけとなって有効ではないかと思いました。(30代、大学院生兼非常勤講師)
- ✓ 刺激がえられた。日頃話すことのできない先生方のお話しが聞けた。違う大学の若手と知り合えた。(30代、学振)
- ✓ 自分自身の研究観や研究方法を膨らますことができた。(20代、大学院生)
- ✓ ものすごく多くのことをアットホームな雰囲気の中で学べた。(20代、大学院生)

【ブリテン No.158 より】

若手研究セミナーの報告

2013年3月10、11日の2日間にわたって、立教大学を会場として、初めての日本教育社会学会「若手研究セミナー」が開催されました。20代から50代までの幅広い年齢層、また広島から筑波に至る広い範囲から、大学院生や非常勤講師の方など30名余のご参加をいただきました。

1日目には学会でご活躍の先生方の講演をお聞きいただき、2日目には参加者によるワークショップを実施しました。講師の先生方のご尽力や事務局の頑張りもあり、参加者からも大変好評でありました。会長からの当セミナー開設のご挨拶をはじめ、詳しくは学会ホームページ「日本教育社会学会若手研究セミナーが初めて開催されました」の頁(<http://www.gakkai.ne.jp/jses/2013/03/29124234.php>)をご参照のこと。

次年度以降の開催について実施時期や開催場所など今後検討したいと思っていますので、今回参加できなかった方はぜひホームページやブリテンのチェックをお忘れなくお願いします。

(事務局長：古賀正義)

第2回

日時：2014年3月16日～17日

場所：関西大学千里山キャンパス 第1学舎3号館 C101 教室

日本教育社会学会 第2回若手研究セミナー 開催のお知らせ

2014年1月14日

日本教育社会学会教育部長 酒井朗

日本教育社会学会では、昨年度に引き続き、全国各地の大学・大学院において教育社会学研究の研鑽を積んでいる若手研究者を対象に、教育社会学の最新の知識の習得と参加者相互の新たなネットワークの構築を図ることを目的としたセミナーを、下記の要領で開催します。

- (1) 主 催 日本教育社会学会
- (2) 日 時 平成26年3月16日(日)13時～3月17日(月)16時30分
- (3) 場 所 関西大学千里山キャンパス 第1学舎3号館 C101 教室
564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 (阪急千里線関大前駅下車徒歩10分)
- (4) 参加対象 大学院生または若手研究者で教育社会学に関心のある方(非学会員も可)
- (5) 定 員 50名(定員になり次第、締め切り)
- (6) 参 加 費 1,500円(当日支払い)
参加費は、資料冊子の印刷費及び通信費等に充当します。交通費・宿泊費につきましては、各自でご準備ください。
1日目終了後、懇親会を開催します。参加希望者は3,000円を別途ご用意下さい。
- (7) プログラム 別紙1の通り
- (8) 申込方法 参加をご希望の方は、必要事項を記入の上、申し込み期間内に、下記の参加申込先までEメールにてお申し込み下さい。
〈必要事項〉 Eメールの件名を「日本教育社会学会若手研究セミナー申し込み」とし、本文に、①氏名、②所属(大学院生は学年も)、③学会員か非会員かの別、④連絡先(電話番号とメールアドレス)、⑤研究テーマ、⑥参加を希望するワークショップの番号、⑦懇親会参加の有無を記入して下さい。
〈受付期間〉 平成26年1月14日(火)～2月28日(金)
〈事前準備〉 参加される方は、別紙1に示した事前準備をお願いします。
- (9) 参加申込・問い合わせ・事前準備ワークシート送信先
【日本教育社会学会第2回若手研究セミナー】(担当：伊藤秀樹)
E-Mail : j ses.seminar2014@gmail.com

(別紙1) 第2回若手研究セミナー プログラム

日	時 間	内 容
3月16日	12:30 ～ 13:00	受 付
	13:00 ～ 14:10	開会挨拶 会長 香川大学教育学部教授 加野芳正 参加者自己紹介、ワークショップ準備
	14:10 ～ 15:40	講義1 京都大学大学院教育学研究科教授 稲垣恭子 演題：教育社会学を学んだ人のための教育社会学再考
	15:40 ～ 16:00	休 憩
	16:00 ～ 17:30	講義2 名古屋大学名誉教授 潮木守一 演題：教育社会学の研究法
	18:00 ～ 20:00	懇親会
3月17日	10:00 ～ 11:30	ワークショップ—研究力の向上を目指して 3つのテーマ別グループに分かれてグループワーク
	11:30 ～ 12:40	昼 食
	12:40 ～ 14:10	ワークショップの続き
	14:10 ～ 14:30	休憩
	14:30 ～ 16:10	講義3 大妻女子大学教職総合支援センター教授 酒井朗 演題：教育臨床社会学の可能性：現場との対話
	16:10 ～ 16:30	閉会式 参加者アンケート

※参加者事前準備

(1) 潮木守一先生の講義の予習として、下記の文献を事前に読んでおくことが望ましい。

- ①潮木守一 1971「高等教育の国際比較—高等教育卒業者の就業構造の比較研究—」『教育社会学研究』第26集、2-16頁 (CiNii でダウンロード可)
- ②潮木守一 1992『ドイツの大学—文化的考察』講談社学術文庫
- ③潮木守一 1997『京都帝国大学の挑戦』講談社学術文庫

(2) 別紙2「第2回若手研究セミナー ワorkshop一覧」の「事前準備」欄の指示に従い、参加申し込み後に別途お送りするワークシートに、必要事項を記入の上、平成26年3月14日(金)までに【日本教育社会学会第2回若手研究セミナー】(jses.seminar2014@gmail.com)までお送り下さい。

(別紙2) 第2回若手研究セミナー ワークショップ一覧

ワークショップ1	テーマ	研究課題、研究計画の立て方
	ファシリテーター	酒井 朗
	参加者	
	内容	事前に提出された研究計画書をもとに、研究課題をどのように立てたらいいか、具体的な研究計画にどのように構想していくかについて参加者とともに検討します。修士論文の計画を立てている方など、研究の全体構想を練る段階にある方にお勧めです。
	事前準備	参加申し込み後、別途お送りするワークシートに次の内容を書いてご準備ください。①研究課題（40字以内）、②問題関心（研究課題を立てた動機や問題の背景）、③研究目的（何をどこまで明らかにしたいか）、④研究計画・方法（研究目的を達成するための研究計画・方法について簡潔に）。
ワークショップ2	テーマ	研究と実践の間のポジティブなサイクルの構築
	ファシリテーター	多賀 太
	参加者	
	内容	調査やフィールドで得た知見をいかに教育社会学研究として結実させるか。研究成果をどう調査対象やフィールドに還元するか。研究者としての立場と実践者または社会の一員としての立場にどう折り合いをつけるか。どのような姿勢で研究テーマに向き合い、どのような方法論を採用するか。
	事前準備	参加申し込み後、別途お送りするワークシートに次の内容を書いてご準備ください。①研究テーマ、②テーマに関する実践的関心、③主に使用している研究方法（例：計量分析、面接、観察、テキスト分析）、④主に依拠している理論や（教育）社会学者（あれば）、⑤上記内容に関する悩みや意見。
ワークショップ3	テーマ	量的研究の設計と方法のために
	ファシリテーター	白川優治
	参加者	
	内容	このワークショップは、これから量的研究・調査を実施しようとする人を対象するものです。自分の研究課題を明らかにするために、どのようなデータをどのように用いるか、質問紙調査をどのように設計し、どのような分析を想定するか、量的手法による研究の設計と分析手法を参加者同士で検討します。
	事前準備	参加申し込み後、別途お送りするワークシートに次の内容を書いてご準備ください。①研究テーマ／研究課題（40文字程度）、②明らかにしたい具体的内容・課題、③用いようと考えてるデータ、④質問項目の案（2つか3つ程度）⑤上記内容に関する悩みや意見。

日本教育社会学会第2回若手研究セミナー
(関西大学千里山キャンパス 2014. 3. 16)

教育社会学を学んだ人のための教育社会学再考

稲垣恭子 (京都大学)

はじめに

1. 辺境学問としての教育社会学

＊ある本のあとがき

＊消去法としての選択

＊曖昧な教育社会学

＊辺境学問の強み

・「辺境性」とは (天野郁夫「辺境性と境界人性」『教育社会学研究』第47集1990)

①社会学からみても、教育学からみても、中心からもっとも遠いところにある学問。あるいは独立の学問領域でありうるかどうかすら危うい。

②教育学部における教育社会学の講座・学科目のポジションが周辺の。

・革新性とフロンティア

学問的にも組織の上でも「辺境」であることはコンプレックスを生むことにもなるが、逆にそれを逆手にとれば、いわゆる「正統学問」のような拘束から自由になって、チャレンジングな研究が開かれていく可能性ももつ。「辺境学問」をうまくいかせば、社会科学(教育学・社会学)に向けてフロンティアを創出することにもなる。

2. フロンティアとしての学歴社会論

＊学歴社会論の隆盛

＊教育の規範的通念とツールとしての教育

・戦後の教育拡大を支えたもの

・規範的「教育学」の前提

＊教育学におけるインパクト

・「即物的」「功利的」という批判 / 教育言説の解体

＊社会科学におけるプレゼンス

教育経済学、学歴社会論、日本社会論

＊ジャーナリズムの期待と波及

「我が国の教育社会学は長年、その研究成果の『固定読者層』『固定購買層』を外部に持つ

ことはなかった。たかだか 700 名前後の会員を対象に、ほぼそとその研究成果を機関誌を通じ、あるいは学会での口頭発表を通じて、ごく限られたサークルに向かって、その成果を問うてきたにすぎない。教育社会学の領域での研究成果を、更に広い読者層に向けてまで、普及させてくれる機関もなければ、組織もなかったのである。ところが学歴社会論はそうではない。学歴とか学歴社会といったテーマは、いまや慢性化した教育論ブームの時代にあつては、マスコミの花形テーマとなった。」（潮木守一「学歴の社会学—その理論的検討—」『教育社会学研究第 38 集 学歴の社会学』1983 年 6 頁）

＊両刃の剣？

3. 制度化・正統化・常識化

＊教育の「表の顔」

- ・効率と成果への社会的ニーズ
- ・教育改革・教育実践を支える根拠
- ・「辺境性」の喪失
- ・現実課題と研究課題

＊新しい「常識」

- ・格差社会論というトピック
- ・古典的テーマ／ジャーナリスティックなテーマ
- ・社会的文脈の変化と前提の常識化
- ・教育社会学のポジションと社会学的知のインパクト

＊ジャーナリズムの優勢

- ・共通の問いと主導権の転換

＊「浮き」理論と「沈み」理論

- ・現実分析を粉飾する理論
- ・理論の応用としての現実分析

＊現実の見え方と知的インパクト

4. アカデミック・フロンティアの発掘

＊内部消費からフロンティアの拡大へ

＊教育文化の社会学の可能性

- ・伝統的制度の終焉と新たな関心
- ・合理性、功利性へのリアクション
- ・失われた文化装置への関心
つながり、信頼、かけがえのなさ、儀礼やたしなみ、修業・・・・
- ・教育文化の社会学へ
- ・教育学のテリトリーの再発見と教育社会学のフロンティア

教育社会学の 研究法

名古屋大学
潮木守一

関心の展開

- 「高等教育の国際比較」の場合
- 大学の拡大＝卒業生の雇用吸収問題
- 感覚的な多い・少ない議論
- はじめは高等教育の規模そのものが分からなかった
- 総理府統計局での作業
- 1875年頃から1960年頃までの大学生数
- O E C Dの発足

1969年発表の OECD統計データ

- メインなファインディング＝表4 と図3
- 16か国が2つのクラスターに分かれる
- 英文論文 A Comparative Study on the Occupational Structure of the Higher Education Graduates, in *The Developing Economies*, Vol.IX, No.3, 1972, pp. 350-368
- Joseph Ben-David のCenters of Learning(1977)で引用

記述よりも検証可能な 命題の発見

- 歴史上、しばしば登場したFrustrated intellectuals
- ⇒知識人論との接続
- しばしば登場するOver-education 論の検証
- 感覚的議論でなく構造的議論
- 職業構造の高度化と大卒者雇用吸収力
- 多数の要因・背景との出会い
- 各国の高等教育の個性に着目
- 歴史研究

「ドイツの大学」、 「アメリカの大学」

- フンボルトから始まるのが正統
- 大学とはものを教えるところよりも、青年のエネルギーの統制機関
- 学生文化への着目（決闘、飲酒、放歌高吟、政治運動）
- 正統な大学史が覆い隠そうとするものの発掘
- 偉大なる教師崇拜でなく無名の学生文化
- 学生の自己形成（＝社会化）の分析

日本の大学史の再検討

- 国際的な影響力下にあった日本
- 「京都帝国大学の挑戦」（1984年初版、1997年講談社学術文庫）
- 東京帝国大学のモデルはドイツの大学という通説への異議申し立て
- ドイツの大学を意図的積極的に取り入れようとしたのは、明治33年から40年の京都帝国大学法科大学
- 学生に研究をさせることを通じて教育する（Bildung durch Forschung）
- しかしこの実験は完成せず

アメリカでのカレッジから 大学への変質

- ドイツ・モデルだったジョンズ・ホプキンス大学
- 大学院の出現
- 学生に研究をさせることで教育する
- 研究と教育の葛藤
- 研究テーマの細分化
- 研究を通じての教育は可能か？

法則発見⇒個性記述

- 目の前の大学を反省する鏡としての過去
- 歴史研究の楽しみ⇒いろいろな発見がある、いろいろな人物に出会える
- フィールドワークとの違い
- FW＝手間暇がかかる。結論は平凡。設定する仮説が平凡。常識で解釈できる結果がでると安心してしまう。常識で理解できない結果がでると解釈できなくなる。

教育臨床社会学の可能性： 現場との対話

大妻女子大学
教職総合支援センター
酒井 朗

研究上のプロフィール

- 修士課程
- 博士課程
- OD
- 助手
- 南山 担当 教育社会学
- お茶大 学校臨床社会学
途中から「なし」
- 大妻 教育制度要説、教育原理

様々なプロジェクト

- M1 高校の習熟度別学級編成に関するプロジェクト
- D1 教師の社会学のレビュー論文
- D2 稲垣忠彦先生らとの長野での授業研究会
- D3ーOD 小学校教師の職業的社会化過程に関する日米比較エスノグラフィー調査
- 南山 教育言説研究会
教師の多忙に関するエスノグラフィー
φ研(若者研)

様々なプロジェクト

- お茶大 ニューカマー研究会
X区不登校対策委員会
理科授業研究会
幼小連携プロジェクト
「総合的な学習の時間」調査
ケータイ研究会
NPO法人TEAM(商業高校での進学支援)
- 大妻 学校に行かない子ども
教育をめぐる排除と包摂 不就学、不登校、高校中退
校種間連携(保幼小連携、小中連携)
教員養成をめぐる課題について

様々な社会的役割

- 教職課程主任、教職総合支援センター所長
- 大学院 専修主任
- A区小中連携評価委員会 委員長
- 中教審教員養成部会 臨時委員
- B市 社会教育委員
- C小学校 外部評価委員
- D高校 運営連絡協議会委員
- 講演 主に小中連携、保幼小連携
たまに不登校、中退関係

研究指導した院生の専門領域

- 教育社会学
- 保育学
- 日本語教育
- 教育心理学
- 家庭科教育

臨床というキーワード

- キャッチワードとしての「臨床」
 - 臨床心理学の影響(心理主義化)
 - 実践的指導力の涵養への社会的要請
 - 教育学への風当たりの強さ
 - 「ミッションの再定義」

国立大学の教員養成大学・学部に対して、教職大学院への重点化、「新課程」の廃止などが提言された。学校現場で指導経験のある大学教員の採用の増加も求められる。

臨床というキーワード

- 一方で社会構成主義による自明性の問い直し
実践性や心理主義化への抵抗
 - 新聞やネットで問題だとされている教育問題を、そのまま鵜呑みにして対応に取り組むことはできない。
 - ただし、教育制度そのものが脆弱さを露呈し、それを支える方策を探し当てなければならなくなった現時点において、自明な日常を見直し、そこに支配する言説を見直していくことは、言葉遊びに映ってしまう可能性も高い。

臨床というキーワード

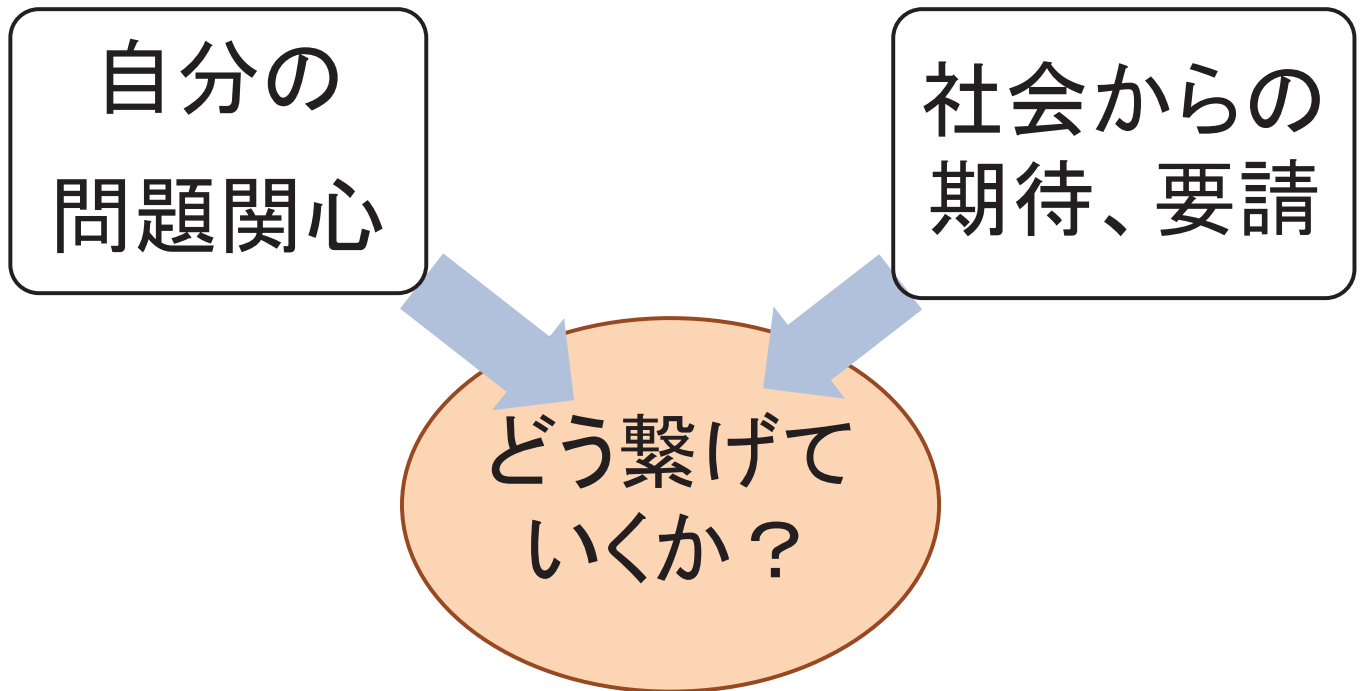
- 教育社会学は相対立する二つの期待に直面している。
 - 一つは、実践性への要請に応じて、その対応に資するような知見や方策を提示することへの期待
 - もう一つは、様々な問題や事象に対する理解のあり方そのものを不断に問い直していくことへの期待。

教育臨床社会学

- 教育臨床社会学
＝これら二つの期待に向き合おうとする
教育社会学

「臨床の概念の下に、一方で批判的視点を持ちながら、教育社会学はどういう立ち位置で現場に向き合うことができるのか。」

社会との繋がりを意識した 研究のあり方



社会との繋がりを意識した研究

- 研究者の立ち位置
- 現場との対話

研究者の立ち位置

- 新しい教育社会学

研究者独自の観点から問いを立てることを信条とせよ。

- －果たしてそうか？

- －現場の問題から立ち上げることの重要性

- －現場への共感的な関わりの大切さ

現場との対話

- ある小学校にて

「先生「自分の実践を価値づけてくれてうれしい」

- きこえの教室の先生との対話

- －保護者との対話が大切なのに教育委員会はそのことを分かってくれない。

- －特別支援は校内研修を行うことが難しい。

- －他区の様子が分からない。

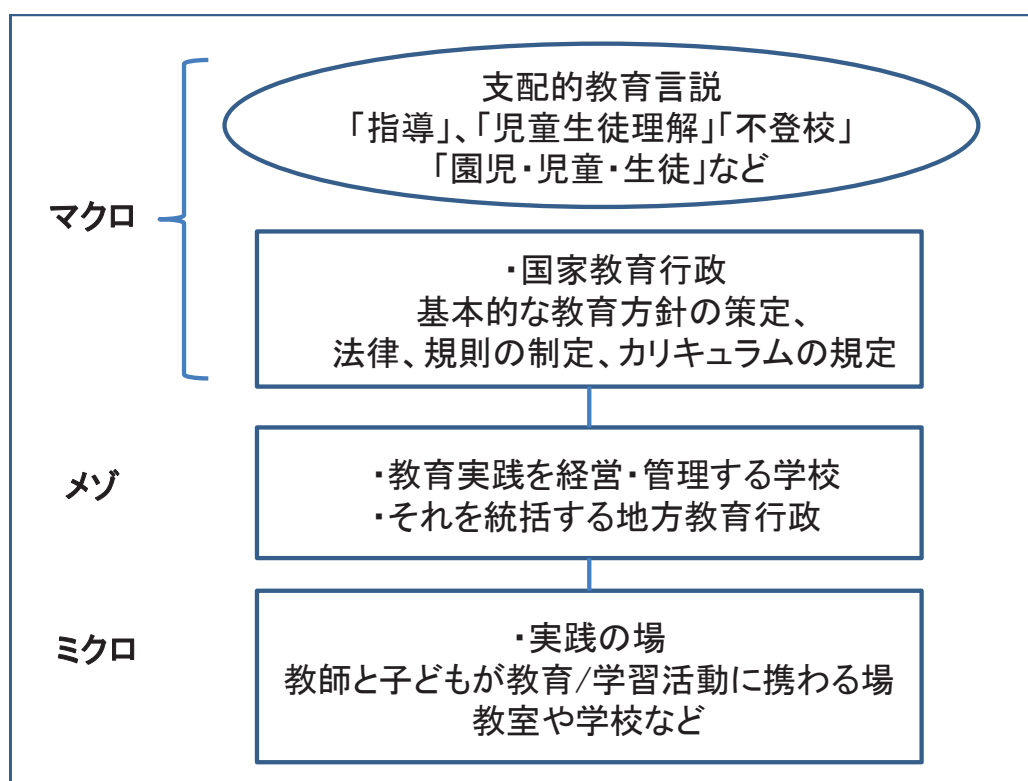
現場との対話

- ある会議にて

ひとりの校長先生

学力テストの結果をデータとして用いること
への抵抗

教育臨床社会学が対象とする現場



レベルで異なる対話のあり方

- ミクロレベル：書記としての研究者
- メゾレベル： 提案者としての研究者
- マクロレベル：批評家としての研究者

書記としての研究者

ミクロレベルにある場合

- 教師や子どもにアプローチする場合、彼らが抱える困難を受容的に理解することが課題となる。
- 研究者は、医療現場における臨床哲学を唱える清水（1997）の言う、書記としてかかわることが有効。
「言葉の専門家は指導しない。指導的理念を提示もしない。リードは現場にいる医療の専門家がする。理念を見いだすのも彼らである。言葉の専門家は、実践する彼らに付き添いつつ、彼らの代理人として、実践の現場を、あるいは記述し、分析し、整理してみせる<書記>である。清水（1997、4頁）」

清水哲郎『医療現場に臨む哲学』勁草書房、1997

提案者としての研究者

メゾレベルにある場合

- 現場でのフィールドワークや資料分析により、課題を究明し、その要因を探り、より積極的に課題の改善に向けた提案を行う。

批評家としての研究者

マクロレベルにある場合

- 現行の法制度や行政施策に対する批判
- 支配的な教育言説に対する批判

キャリアの初期の方へ

- 研究について
自分のこだわりは大切に
テーマは現場にある。
研究成果を発信する相手を意識する。
一途に、そして幅広く。

論文について

- 論文＝論理の文
- リサーチクエスチョンを立てること
- 読み手を意識して
どうやったら相手を説得させられるか？
 - 下書きを書いてからが勝負
 - 分析のための概念、分析から生成される概念など、概念化が大切

サバイバルについて

- ほめて育てられることの大切さ
「批判は実力の10倍できる」
- ネットワークの効力
少し離れた分野の人
現場の人
他大学の人
出版関係の人
- ポストが人を育てる

おわりに

- 日本教育社会学会第66回大会
2014年9月13日(土)、14日(日)
愛媛大学・松山大学(共催)
9月12日午後に交流会を実施しますので
ぜひご参加下さい。

➤ 近刊予告

酒井朗『教育臨床社会学の可能性(仮題)』勁草書房

第2回若手研究セミナーの報告

1. 開催日時と場所

日時 2014年3月16日（日）～17日（月）
場所 関西大学千里山キャンパス

2. セミナーの概要

2014年3月16日、17日の2日間、第2回若手研究セミナーが関西大学千里山キャンパスで開催されました。参加者は主に関西圏の若手研究者でしたが、関東や中四国、九州からも参加があり、全部で32名に達しました。このほか、会長、事務局長、講師の先生方、アシスタントの若手研究者ならびに教育部員を含めると、総勢で40名を超えました。

1日目は会長の加野芳正先生の挨拶に続いて、アイスブレイクのために小グループに分かれて自己紹介を行い、その後、京都大学教授・稲垣恭子先生と名古屋大学名誉教授・潮木守一先生から講義がありました。稲垣先生は「教育社会学を学んだ人のための教育社会学再考」と題し、学問上の辺境性ゆえに教育社会学が持ち得たチャレンジ精神を再確認すべきだと訴えました。講義では、教育社会学が、学歴研究など、学問上のフロンティアを開拓してきたことを振り返った上で、現在の教育社会学が制度化、正当化、常識化し、研究が内向きに内部消費されていることに警鐘を鳴らしました。また潮木先生は、「教育社会学の研究法」と題し、定説に対する批判を旨として高等教育研究を進めてきたことについて話されました。かつての高等教育の議論が感覚的レベルに終始していたことへの批判から、統計データに基づいて構造的な議論を進めていった経緯、その後大学史に関心を広げ、正統な大学史が覆い隠そうとしてきた学生文化に注目したことなどについて話されました。

2日目は、午前から午後にかけて、3グループに分かれてワークショップを開催しました。ファシリテーターは酒井と教育部副部長の多賀、白川が務めました。各グループのテーマは、それぞれ「研究課題、研究計画の立て方」、「研究と実践の間のポジティブなサイクルの構築」、「量的研究の設計と方法のために」であり、受講者はいずれかのグループに参加しました。その後、酒井が「教育臨床社会学の可能性：現場との対話」と題して、自らの研究の流れや、臨床の概念の意味、現場との対話の仕方、研究者の役割などについて講義しました。最後に西島央事務局長から挨拶いただき、2日間の日程を無事終了しました。

受講後のアンケートでは、参加者の大半が「とてもよかった」と回答しています（32名中24名）。自由記述欄には、講師の話やワークショップに対する好意的な感想とともに、他大学の人と知り合えたことや、初日の自己紹介で安心できたことなどの感想が多く寄せられました。なお、今回のセミナーの開催にあたっては、多くの理事の先生方からご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

教育部長 酒井朗

3. 参加者の内訳（アシスタント 2 名を含む 34 名）

職位	大学院生（修士課程）	11 名
	大学院生（博士課程）	13 名
	学部生	2 名
	学振特別研究員	1 名
	助教	2 名
	准教授	1 名
	その他	4 名

地域	関西	28 名
	その他	6 名

4. セミナーの様子



5. 参加者に対するアンケートの回答

(1) 今回のセミナーに参加してみてもいかがでしたか。

とてもよかった…24名　まあよかった…7名　普通…1名　無回答…0名

理由（抜粋）

- ✧ 他の院生の研究を聞くことができ、とても有意義な時間を過ごせました。
- ✧ 日頃一人で研究しているので、年1回のこのセミナーは大変ありがたいです。
- ✧ 横のつながりだけでなく縦のつながりをも確保していただけた有り難かったです。
- ✧ 同期とつながることができたことで不安も少し和らぐことが出来た。
- ✧ どう研究を進めてよいのか悩んでいたのも、他大学の方々と同じような悩みを話し合えてよかった。
- ✧ 自分が今後入っていく研究室は先輩がおらず同期も少ないため、このようなセミナーを通じて研究について話す機会が持てたことが糧になった。
- ✧ 学会発表経験のないマスターにとっては、学会大会の際の懇親会・交流会はやや参加しにくいところがあったが、このセミナーはマスターにも開かれている雰囲気でもとても嬉しかった。
- ✧ 学会に行っても有名な先生方と見知らぬ人たちの間で緊張ばかりするのですが、今回参加させていただいたことで皆さんを身近に感じ、研究をすすめる意欲へとつながりました。
- ✧ 「空間を共にして肉声で語り合う」ことの重要性を身を以て体感することができた貴重な機会になりました。
- ✧ 自己紹介の段階から交流を促進する形になっていてよかった。
- ✧ 自己紹介がはじめにあったことで参加者同士それ以降声をかけたりしやすかったと感じます。
- ✧ 最初の自己紹介を少人数のグループでもらえたのが緊張が和らぎました。
- ✧ 研究室外の普段は関わらない研究者の方と関わることで自分の立ち位置や新しい視点を得ることが出来た。
- ✧ 普段は論文・本でしか「対話」できない著名な先生方の生の声が聞けたことで、より深い理解ができた。
- ✧ 講演がすごく刺激的だった。査読に通すとか博論の審査をクリアするとかちっぽけな目標に囚われているんじゃなくて研究者としてもっと大きな目標を持ち続けていきたいと思った。
- ✧ 『京都帝国大学の挑戦』の潮木先生のお話を生でお伺いすることが出来て非常に貴重な経験だった。
- ✧ 稲垣先生の教育社会学の面白さとは何かというお話は涙が出るほどありがたいお話でした。
- ✧ 講演やワークショップを通して研究者のキャリアを考えたり、自分の研究を見直したりすることができました。
- ✧ 講演が少し長いと感じました。
- ✧ 多賀先生のワークショップも自分を見つめ直す機会となって良かったです。
- ✧ 2日目のWSをもう少し時間がとれてdiscussionできるとなるとよかったと思います。

第2回若手研究セミナーの報告

2014年3月16日、17日の2日間、第2回若手研究セミナーが関西大学千里山キャンパスで開催されました。参加者は主に関西圏の若手研究者でしたが、関東や中四国、九州からも参加があり、全部で32名に達しました。このほか、会長、事務局長、講師の先生方、アシスタントの若手研究者ならびに教育部員を含めると、総勢で40名を超えていました。

1日目は会長の加野芳正先生の挨拶に続いて、アイスブレイクのために小グループに分かれて自己紹介を行い、その後、京都大学教授・稲垣京子先生と名古屋大学名誉教授・潮木守一先生から講義がありました。稲垣先生は「教育社会学を学んだ人のための教育社会学再考」と題し、学問上の辺境性ゆえに教育社会学が持ちえたチャレンジ精神を再確認すべきだと訴えました。講義では、教育社会学が、学歴研究など、学問上のフロンティアを開拓してきたことを振り返った上で、現在の教育社会学が制度化、正当化、常識化し、研究が内向きに内部消費されていることに警鐘を鳴らしました。また潮木先生は、「教育社会学の研究法」と題し、定説に対する批判を旨として高等教育研究を進めてきたことについて話されました。かつての高等教育の議論が感覚的レベルに終始していたことへの批判から、統計データに基づいて構造的な議論を進めていった経緯、その後大学史に関心を広げ、正統な大学史が覆い隠そうとしてきた学生文化に注目したことなどについて話されました。

2日目は、午前から午後にかけて、3グループに分かれてワークショップを開催しました。ファシリテーターは酒井と教育部副部長の多賀、白川が務めました。各グループのテーマは、それぞれ「研究課題、研究計画の立て方」、「研究と実践の間のポジティブなサイクルの構築」、「量的研究の設計と方法のために」であり、受講者はいずれかのグループに参加しました。その後、酒井が「教育臨床社会学の可能性：現場との対話」と題して、自らの研究の流れや、臨床の概念の意味、現場との対話の仕方、研究者の役割などについて講義しました。最後に西島央事務局長から挨拶いただき、2日間の日程を無事終了しました。

受講後のアンケートでは、参加者の大半が「とてもよかった」と回答しています（32名中24名）。自由記述欄には、講師の話やワークショップに対する好意的な感想とともに、他大学の人と知り合えたことや、初日の自己紹介で安心できたことなどの感想が多く寄せられました。なお、今回のセミナー開催にあたっては、多くの理事の先生方からご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

教育部では、9月の大会時に若手研究者交流会を開催する予定です。日程等の詳細については、学会ホームページや大会案内を通じて随時アナウンスして参ります。

（教育部長：酒井朗）

第3回

日時：2015年3月28日～29日

場所：大妻女子大学千代田キャンパス

日本教育社会学会 第3回若手研究セミナー 開催のお知らせ

2015年1月10日

日本教育社会学会教育部長 酒井朗

日本教育社会学会では、教育社会学研究の研鑽を積んでいる若手研究者を対象に、教育社会学の最新の知識の習得と参加者相互の新たなネットワークの構築を図ることを目的としたセミナーを、下記の要領で開催します。

- (1) 主 催 日本教育社会学会
- (2) 日 時 平成27年3月28日(土) 13時～3月29日(日) 15時40分
- (3) 場 所 大妻女子大学千代田キャンパス 本館E棟4階
〒102-8357 東京都千代田区三番町12
(地下鉄半蔵門駅徒歩8分またはJR市ヶ谷駅徒歩15分)
- (4) 参加対象 大学院生または若手研究者で教育社会学に関心のある方(非学会員も可)
- (5) 定 員 50名(定員になり次第、締め切り)
- (6) 参 加 費 1,500円(当日支払い)
参加費は、資料冊子の印刷費及び通信費等に充当します。交通費・宿泊費につきましては、各自でご準備ください。
1日目終了後、懇親会を開催します。参加希望者は3,000円を別途ご用意下さい。
- (7) プログラム 別紙1の通り
- (8) 申込方法 参加をご希望の方は、必要事項を記入の上、申し込み期間内に、下記の参加申込先までEメールにてお申し込み下さい。
 - 〈必要事項〉 Eメールの件名を「日本教育社会学会若手研究セミナー申し込み」とし、本文に、①氏名、②所属(大学院生は学年も)、③学会員か非会員かの別、④連絡先(電話番号とメールアドレス)、⑤研究テーマ、⑥参加を希望するワークショップの番号、⑦懇親会参加の有無を記入して下さい。
 - 〈受付期間〉 平成27年1月13日(火)～2月28日(土)
 - 〈事前準備〉 参加される方は、別紙2に示した事前準備をお願いします。
- (9) 参加申込・問い合わせ・事前準備ワークシート送信先
【日本教育社会学会第3回若手研究セミナー】(担当：伊藤秀樹)
E-Mail : jses.seminar2014@gmail.com

(別紙1) 第3回若手研究セミナー プログラム

日	時 間	内 容
3 月 28 日	12:30 ～ 13:00	受 付
	13:00 ～ 14:10	開会挨拶 会長 香川大学教育学部教授 加野芳正 参加者自己紹介、ワークショップ準備
	14:10 ～ 15:40	講義1 東京大学社会科学研究所教授 佐藤香 「データの復元作業から学んだこと」
	15:40 ～ 16:00	休 憩
	16:00 ～ 17:30	講義2 共栄大学教育学部長 藤田英典 「教育社会学の方法と課題：一教育社会学研究者としての歩みを踏まえて」
	18:00 ～ 20:00	懇親会
3 月 29 日	10:00 ～ 11:30	<u>ワークショップー研究力の向上を目指して</u> 3つのテーマ別グループに分かれてグループワーク 1 知らない時代のリアリティをつかむー歴史研究と文学的想像力 (ファシリテーター 井上義和：帝京大学総合教育センター准教授) 2 理論と実証の関係を考える (ファシリテーター 中村高康：東京大学大学院教育学研究科教授) 3 フィールドワークの進め方 (ファシリテーター 清水睦美：日本女子大学人間社会学部教授)
	11:30 ～ 12:40	昼 食
	12:40 ～ 14:10	ワークショップの続き
	14:10 ～ 14:30	休憩
	14:30 ～ 15:20	全体での振り返り
	15:20 ～ 15:40	閉会式 参加者アンケート

※参加者事前準備

別紙2「第3回若手研究セミナー ワorkshop一覽」の「事前準備」欄の指示に従い、参加申し込み後に別途お送りするワークシートに、必要事項を記入の上、平成27年3月14日(土)までに【日本教育社会学会第3回若手研究セミナー】(jses.seminar2014@gmail.com)までお送り下さい。

(別紙2) 第3回若手研究セミナー ワークショップ一覧

ワークショップ1	テーマ	知らない時代のリアリティをつかむー歴史研究と文学的想像力
	ファシリテーター	井上義和
	内容	小説や自伝などの文学的コンテンツは、「いま・ここ」にない時代を対象としている場合には、私たちのリアリティを拡張してくれる格好の道具となり、歴史研究のヒントの宝庫にもなります。参加者同士、コンテンツを紹介し合い、教科書的な歴史知識の外に出るためのヒントを考えます。
	事前準備	①関心のあるテーマ(歴史)、②テーマと関係のありそうな文学作品(小説・自伝など)、③文学作品(②)の概要とテーマ(①)との関連、④文学作品の歴史研究への使い方についての悩みや意見。
ワークショップ2	テーマ	理論と実証の関係を考える
	ファシリテーター	中村高康
	内容	広い意味での理論(＝抽象的思考)と広い意味での実証(＝具体的論拠)の関係をどのように考えたらよいのかという点について、教育社会学の研究をする立場から参加者とともに考えてみたい。
	事前準備	①いま取り組もうとしている研究課題、②研究の成果をどのように生かしたいと思っているのか、③そこで具体的に明らかにしたいと思っていること(未着手の課題も可)、④それをどのような方法(調査・資料・データ・分析技法)で論証できると考えるか(あるいは論証しようとしているか)、⑤本ワークショップのテーマ・内容に関わるご自身の悩みや意見
ワークショップ3	テーマ	フィールドワークの進め方
	ファシリテーター	清水睦美
	内容	フィールドワークを進めていく上での基礎的なスキルの確認と、それに関わる参加者の悩みを取り上げて、研究として結実させていくための方法を検討します。実際にフィールドワークを行ったことのある方、あるいは、現在フィールドで困っている方にお勧めですが、これからフィールドワークを行おうという方も、参加者相互のやりとりが貴重な事前学習になると思います。
	事前準備	①研究テーマ、②上記のテーマでのフィールドワーク期間(フィールドワークの予定期間、現在どのくらいの期間が終了しているのか)、③明らかにしたい具体的な内容(リサーチクエスション)、④フィールドワークでの基礎的スキル(観察・インタビュー・フィールドでの位置・フィールドノートの取り方・フィールドで会う人との関係等)について現在抱えている悩みや心配(2項目程度)、⑤その他の悩みや問題等

※事前準備については、参加申込み後、別途お送りするワークシートに、希望するワークショップで指示された内容を書いてご準備ください。

第 3 回若手研究セミナーの報告

2015 年 3 月 28、29 日の二日間、第三回若手研究セミナーが大妻女子大学千代田キャンパスで開催されました。参加者は 33 名で、大学院生のほか、学部 4 年生や講師や助教の職にある方もいました。

1 日目は、加野芳正会長による挨拶に続き、参加者相互に自己紹介を行った後で、東京大学教授の佐藤香先生と、共栄大学教育学部長の藤田英典先生による講義がありました。佐藤先生は、「データの復元作業から学んだこと」と題し、過去の調査データを原票から復元する作業の経験を具体的に紹介するとともに、仮説から研究課題を立ち上げて進めてきた研究をもとに講義をされました。データの復元が、技術の深化・革新や分析手法の進化のなかで、計量歴史社会学として発展してきたことを説明されるとともに、学問的貢献として二次利用やデータ復元作業への協力を呼びかけられました。

藤田先生は「教育社会学の方法と課題：一教育社会学研究者としての歩みを踏まえて」と題し、研究面及び学術政策・教育政策面でなされてきたお仕事を簡単に紹介した後に、これまでに先生が取り組まれてきた研究テーマや研究関心が、機会の構造と不平等・再生産問題や学校教育の制度や組織・文化の問題から、教育政策批判や政策研究へのコミットメントを強め、さらに教育の公共性や共生社会の問題へと広がっていった過程について講義されました。そのうえで、座視できない最近の事例として、施設一体型の小中一貫校の拡大がはらむ問題や道德の教科化について、見解を述べられました。

2 日目は、「研究力の向上を目指して」と題し、3 つのグループに分かれてワークショップを開催しました。ファシリテーターは帝京大学准教授の井上義和先生、東京大学教授の中村高康先生、日本女子大学教授の清水睦美先生が務められ、それぞれ「知らない時代のリアリティをつかむー歴史研究と文学的想像力」、「理論と実証の関係を考える」、

「フィールドワークの進め方」と題して参加者とともに話し合いました。最後に西島央事務局長から挨拶いただき、2 日間の日程を無事終了しました。

受講後のアンケートでは、参加者の大半が「とてもよかった」と回答しています（33 名中 27 名）。自由記述欄には、知的好奇心をかきたてられ研究に対するモチベーションが上がった、ものごとを考える際の視野の広さがとても勉強になった、参加者同士で研究テーマについて互いに知り、交流することができてよかったなど、多数のコメントが寄せられました。

年度末の大変お忙しい時期にもかかわらず、本セミナーにご協力下さった先生方に厚く御礼申し上げます。

(前教育部長：酒井朗)

第4回

日時：2016年3月26日～27日

場所：東京理科大学神楽坂キャンパス

日本教育社会学会 第4回若手研究セミナー 開催のお知らせ

2016年1月9日

日本教育社会学会教育部長 清水睦美

日本教育社会学会では、教育社会学研究の研鑽を積んでいる若手研究者を対象に、教育社会学の最新の知識の習得と参加者相互の新たなネットワークの構築を図ることを目的としたセミナーを、下記の要領で開催します。

- (1) 主 催 日本教育社会学会
- (2) 日 時 平成28年3月26日(土) 13時～3月27日(日) 15時40分
- (3) 場 所 東京理科大学 神楽坂キャンパス
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-3
(JR・地下鉄飯田橋駅徒歩3分)
- (4) 参加対象 大学院生または若手研究者で教育社会学に関心のある方(非学会員も可)
- (5) 定 員 50名(定員になり次第、締め切り)
- (6) 参 加 費 1,500円(当日支払い)
参加費は、資料冊子の印刷費及び通信費等に充当します。交通費・宿泊費につきましては、各自でご準備ください。
1日目終了後、懇親会を開催します。懇親会費は別途ご用意下さい。3,500円程度を見込んでおります。
- (7) プログラム 別紙1の通り
- (8) 申込方法 参加をご希望の方は、必要事項を記入の上、申し込み期間内に、下記の参加申込先までEメールにてお申し込み下さい。
 - 〈必要事項〉 Eメールの件名を「日本教育社会学会若手研究セミナー申し込み」とし、本文に、①氏名、②所属(大学院生は学年も)、③学会員か非会員かの別、④連絡先(電話番号とメールアドレス)、⑤研究テーマ、⑥参加を希望するプログラム(天野先生講演、ワークショップの番号)、⑦懇親会参加の有無を記入して下さい。
 - 〈受付期間〉 平成28年1月12日(火)～2月29日(月)
 - 〈事前準備〉 参加される方は、別紙2に示した事前準備をお願いします。
- (9) 参加申込・問い合わせ・事前準備ワークシート送信先
【日本教育社会学会第4回若手研究セミナー】(担当：呉永鎬)
E-Mail : jses.seminar2016@gmail.com

(別紙 1) 第 4 回若手研究セミナー プログラム

日	時 間	内 容
3 月 26 日	12:30 ～ 13:00	受 付
	13:00 ～ 14:10	開会挨拶 参加者自己紹介、ワークショップ準備
	14:10 ～ 15:40	講演 東京大学名誉教授 天野郁夫 「私の教育社会学研究 50 年」
	15:40 ～ 16:00	休 憩
	16:00 ～ 16:30	コメント 筑波大学准教授 森 直人
	16:30 ～ 17:30	全体討論
	18:00 ～ 20:00	懇親会
3 月 27 日	10:00 ～ 11:30	<u>ワークショップ—研究力の向上を目指して</u> 3つのテーマ別グループに分かれてグループワーク 1 質的方法と量的方法を架橋する (仮) (ファシリテーター 山田哲也:一橋大学大学院社会学研究科准教授) 2 低コストで研究を展開し、情報を発信する (仮) (ファシリテーター 内田良:名古屋大学大学院教育学研究科准教授) 3 外国社会を対象に含めた研究を行う (仮) (ファシリテーター 有田伸:東京大学社会科学研究所教授)
	11:30 ～ 12:40	昼 食
	12:40 ～ 14:10	ワークショップの続き
	14:10 ～ 14:30	休憩
	14:30 ～ 15:20	全体での振り返り
	15:20 ～ 15:40	閉会式 参加者アンケート

※参加者事前準備

別紙 2 「第 4 回若手研究セミナー ワorkshop一覧」の「事前準備」欄の指示に従い、参加申し込み後に別途お送りするワークシートに、必要事項を記入の上、平成 28 年 3 月 12 日 (土)までに【日本教育社会学会第 4 回若手研究セミナー】(jses.seminar2016@gmail.com)までお送り下さい。

(別紙2) 第4回若手研究セミナー ワークショップ一覧

ワークショップ1	テーマ	質的方法と量的方法を架橋する (仮)
	ファシリテーター	山田哲也
	内容	複雑な現象を多面的に捉え、実践的な含意を導き出す研究方法論として、質的・量的な社会調査法を組み合わせた混合研究法が注目されています。参加者の経験（あるいは研究構想）をもとに交流し、質的方法と量的方法をどのように組み合わせればより効果的に対象に迫れるのか、そのヒントを考えます。
	事前準備	①研究テーマ、②明らかにしたい問い（リサーチ・クエスチョン）、③これらを解明するための方法、④質的・量的な方法の長所・短所に関する考え、⑤質的・量的な方法をどのように組み合わせているか（組み合わせようとしているのか）、⑥研究を進める上で困ったこと、悩んでいること（研究構想段階の方は、③以降は現時点で想定していることを記載してください）
ワークショップ2	テーマ	低コストで研究を展開し、情報を発信する (仮)
	ファシリテーター	内田良
	内容	調査研究においてはさまざまなコスト（費用、時間、人・物の準備、心的負担等）が生じます。それをできるだけ抑えた「Ⅰ. 低コストな研究の方法」（例：二次分析、ドキュメント分析等 ※ここを探ることが本 WS の主題）を具体的に検討します。また補足的な課題として、院生という情報発信力がまだ小さい立場において、教育系一般誌や新聞社を含むジャーナリズム、関連業界の組織・実践者や研究者から注目してもらうための「Ⅱ. 低コストな情報発信の方法」（例：SNS の活用、地方小規模学会や実践系学会の活用等）を模索します。
	事前準備	「Ⅰ. 低コストな研究の方法」に関して、①低コストで調査研究を進めていると思われる学術論文を数点探し出す。②上記論文がどのような点で低コストであるのかを整理する。「Ⅱ. 低コストな情報発信の方法」に関して、③調査研究の成果を低コストで発信するための方法を検討する。なお、①～③の準備内容には、適宜自身の研究活動（論文や取り組み）を含んでもよいです。
ワークショップ3	テーマ	外国社会を対象に含めた研究を行う (仮)
	ファシリテーター	有田伸
	内容	外国社会を対象とした／対象に含めた研究は、社会や教育のあり方を相対的な視角から考えていく上で大きな意義をもちます。このワークショップでは、そのような研究を具体的にどう行っていけばよいのか、またその成果をどのように提示していけばよいのかを考えていきます。これから比較研究を手がけてみたいという方にも参加いただけます。
	事前準備	①研究を行おうとするテーマ・課題、②どの社会を対象として研究を行おうと考えているか、またその理由は何か、③現在考えている研究方法、④その社会を対象とすることの意義や「面白さ」を、一般的なオーディエンスに対してどう提示しようと考えているか（可能な範囲で構いません）、⑤本ワークショップのテーマ・内容に関わるご自身の悩みや意見

※事前準備については、参加申込み後、別途お送りするワークシートに、希望するワークショップで指示された内容を書いてご準備ください。

第4回若手研究セミナーの報告

2016年3月26、27日の二日間、第四回若手研究セミナーが東京理科大学神楽坂キャンパスで開催されました。参加者数は延べ62名（一日目35名、二日目27名）で、大学院生のほか、学部4年生や准教授や講師、助教の研究職にある方、民間企業や官庁にお勤めの方もいました。

1日目は、参加者相互に自己紹介を行った後で、東京大学名誉教授の天野郁夫先生の講演と、筑波大学准教授の森直人先生によるコメントがありました。天野先生は「私の教育社会学研究50年」と題し、学部学生の時代から研究所や大学を経て、今日までの50余年に及ぶ研究活動を振り返られました。時々の社会状況や政策的課題と対峙し、近代化論を背景とした「経済発展と教育」や「教育計画」から、学歴社会研究や選抜研究を間に挟みつつ、比較高等教育システム論にもとづく高等教育研究へと柔軟にシフトしていく研究史についての語りは、日本の教育社会学史についての重要な「証言」であるばかりではなく、若手研究者たちにさらなる挑戦を促す個人史の語りでもありました。天野先生の教えを受けた最後の世代の一人であり、また世代的・年齢的には若手参加者に近い森先生は、天野先生の研究史を大胆に整理して、その分水嶺が1970年代半ばにあること、その後の天野先生が十分には展開しなかった論点のなかには、今日の若手研究者の関心と通底するところがあることなどを指摘することで、天野先生と若手参加者との間にある「距離」を巧みに縮められました。さらに、天野先生の数々の研究には、時々の理論動向に左右されない資料的価値もまた高いことを強調されました。全体討論では、非常に多くの質問が寄せられ、途中で打ち切らざるを得ませんでした。その後の懇親会には講師の先生方4名や教育部スタッフを含む36名が参加し、熱い議論が交わされました。

2日目は、「研究力の向上を目指して」と題し、3つのグループに分かれてワークショップを開催しました。ファシリテーターは一橋大学准教授の山田哲也先生、名古屋大学准教授の内田良先生、東京大学教授の有田伸先生が務められました。山田先生は「質的方法と量的方法を架橋する」と題し、混合研究法の基本的な考え方や研究デザインの仕方について解説されました。内田先生は「低コストで研究を展開し、情報を発信する」と題し、若手研究者の投入可能な資源の乏しさをふまえて、時間的・金銭的・心理的コストを抑えられる既存の数量的データの二次分析を提案されました。有田先生は「外国社会を対象に含めた研究を行う」と題し、比較研究を「とりあえずやってみる」ことを勧めるとともに、「比べてみました・調べてみました」という次元をどう超えるのかについて、ご自身の経験に即して語られ

ました。いずれのグループにおいても、参加者各自の研究関心に即した話し合いや意見交換が意欲的になされました。最後に、参加者が一堂に会して、各グループでの話し合いの様子をお互いに紹介しあい、2日間の日程を無事終了しました。

受講後のアンケートでは、参加者の大半が「とてもよかった」と回答しています（34名中28名）。自由記述欄には、研究に対する姿勢そのものや研究者としてのキャリアを考えるうえで、とてもためになった、「研究を今後どうやって発展させていくか」という前向きな語り合いができた、研究途上の方々と知り合える機会として、これからも続けてほしいなど、多数のコメントが寄せられました。

年度末の大変お忙しい時期にもかかわらず、本セミナーにご協力下さった先生方に厚く御礼申し上げます。

（教育部：堀健志・呉永鎬・坂口真康・知念渉・林明子）

第5回

日時：2017年3月25日～26日

場所：大阪大学人間科学部

日本教育社会学会 第5回若手研究セミナー 開催のお知らせ

2017年1月7日

日本教育社会学会教育部長 清水睦美

日本教育社会学会では、教育社会学研究の研鑽を積んでいる若手研究者を対象に、教育社会学の最新の知識の習得と参加者相互の新たなネットワークの構築を図ることを目的としたセミナーを、下記の要領で開催します。

- (1) 主 催 日本教育社会学会
- (2) 日 時 平成29年3月25日(土) 13時 ～ 3月26日(日) 15時40分
- (3) 場 所 大阪大学人間科学部
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1番2号
(大阪モノレール彩都線 阪大病院前駅下車 徒歩約10分)
- (4) 参加対象 大学院生または若手研究者で教育社会学に関心のある方(非学会員も可)
- (5) 定 員 50名(定員になり次第、締め切り)
- (6) 参 加 費 1,500円(当日支払い)
参加費は、資料冊子の印刷費及び通信費等に充当します。交通費・宿泊費につきましては、各自でご準備ください。
1日目終了後、懇親会を開催します。参加希望者は3,500円を別途ご用意下さい。
- (7) プログラム 別紙1の通り
- (8) 申込方法 参加をご希望の方は、必要事項を記入の上、申し込み期間内に、下記の参加申込先までEメールにてお申し込み下さい。
〈必要事項〉 Eメールの件名を「日本教育社会学会若手研究セミナー申し込み」とし、本文に、①氏名、②所属(大学院生は学年も)、③学会員か非会員かの別、④連絡先(電話番号とメールアドレス)、⑤研究テーマ、⑥参加を希望するワークショップの番号、⑦懇親会参加の有無を記入して下さい。
〈受付期間〉 平成29年1月16日(月)～2月28日(火)
〈事前準備〉 参加される方は、別紙2に示した事前準備をお願いします。
- (9) 参加申込・問い合わせ・事前準備ワークシート送信先
【日本教育社会学会第5回若手研究セミナー】(担当：坂口・知念)
E-Mail : jses.seminar2016+2017@gmail.com

(別紙1) 第5回若手研究セミナー プログラム

日	時 間	内 容
3 月 25 日	12:30 ～ 13:00	受 付
	13:00 ～ 13:50	開会挨拶 清水睦美 教育部長 参加者自己紹介、ワークショップ準備
	13:50 ～ 15:30	講演1 お茶の水女子大学名誉教授 箕浦康子 「子どもと文化：私の研究史 40 年」
	15:30 ～ 15:50	休 憩
	15:50 ～ 17:30	講演2 大阪大学大学院教授 志水宏吉 「若手教育社会学者へのエール ～研究と実践との関係性をめぐって～」
	18:00 ～ 20:00	懇親会
3 月 26 日	10:00 ～ 11:30	<u>ワークショップー研究力の向上を目指して</u> 3つのテーマ別グループに分かれてグループワーク 1 量的研究を成功させるには (ファシリテーター 荒牧 草平：日本女子大学准教授) 2 研究テーマを展開する (ファシリテーター 片山 悠樹：愛知教育大学講師) 3 研究を国際発信する (ファシリテーター 松岡 亮二：早稲田大学高等研究所助教)
	11:30 ～ 12:40	昼 食
	12:40 ～ 14:10	ワークショップの続き
	14:10 ～ 14:30	休憩
	14:30 ～ 15:20	全体での振り返り
	15:20 ～ 15:40	閉会式
		参加者アンケート

※参加者事前準備

別紙2「第5回若手研究セミナー ワorkshop一覧」の「事前準備」欄の指示に従い、参加申し込み後に別途お送りするワークシートに、必要事項を記入の上、平成29年3月10日(金)までに【日本教育社会学会第5回若手研究セミナー】(jses.seminar2016+2017@gmail.com)までお送り下さい。

(別紙2) 第5回若手研究セミナー ワークショップ一覧

ワークショップ1	テーマ	量的研究を成功させるには
	ファシリテーター	荒牧草平
	内容	どうすれば意義のある研究を行えるのでしょうか。このワークショップでは、計量研究に固有の側面と、計量研究に限らず必要とされる側面の双方について、特に「研究・分析課題」「理論」「研究方法」「結果の解釈」相互の妥当性や整合性という観点に着目して、研究（論文）を成功させる条件について考えてみたいと思います。学術誌に、意義のある計量論文が掲載される一助となれば幸いです。
	事前準備	①何を明らかにしたいのか、②理論仮説とその根拠、③調査・分析方法（調査の対象・方法・作業仮説）、④（すでに結果が出ている場合）主な結果とその解釈、⑤困っていること、について教えて下さい。 (研究構想段階の方は、現時点で計画・予定していることで結構です)。
ワークショップ2	テーマ	研究テーマを展開する
	ファシリテーター	片山 悠樹
	内容	複雑な教育現象を理解するため、多様な研究テーマが設定されていますが、相互に関連していないわけではありません。部分的であれ関連しており、何らかの共通項がみられることもあります。このワークショップでは、参加者の現在の研究テーマを問いなおしつつ、他の研究テーマを参考にすることで、テーマの幅を広げることを目的とします。
	事前準備	①現在の研究テーマ（テーマ1）の学術論文を読み、共通の前提や関心を数点挙げてください。②テーマ1で引用される主要論文が、他の研究テーマ（テーマ2）でも言及されているかを確認してください。そして、そのテーマは何かを挙げてください。③テーマ1とテーマ2で共通する部分と異なる部分を挙げてください。また、可能であれば、テーマ1とテーマ2を比較検討したうえで、仮説を設定してみてください（妄想でも構いません）。④研究テーマの幅を広げるうえでの悩みなどを書いてください。
ワークショップ3	テーマ	研究を国際発信する
	ファシリテーター	松岡 亮二
	内容	海外における学会発表や国際学術誌への論文投稿など研究を国際発信する際、日本語の論文をそのまま訳しても聴衆・読み手にはなかなか伝わりません。国際学会での発表、国際学術誌への投稿について概観した上で、参加者の研究課題や対象に合わせてどのような研究の理由付けや構成が望ましいのか議論します。なお、まだ何を発信するかも決めていないけれど興味があるような方も歓迎します。
	事前準備	研究国際発信についての経験と今後の計画の概要、それに国際発信したい・する予定の研究テーマ・課題を書き出してください（日本語）。その上で、研究の理由付け・意義を含む簡潔な要旨 2 種類——日本語論文版と英字論文版——の準備をお願いします（英字論文版も日本語可）。言語によって想定読者が大きく変わるので、自然とその書きだしや強調する学術的意義、構成などが異なるかと思います。本テーマに関する意見や悩みなども歓迎します。

※事前準備については、参加申込み後、別途お送りするワークシートに、希望するワークショップで指示された内容を書いてご準備ください。

第5回若手研究セミナーの報告

2017年3月25、26日の二日間、第五回若手研究セミナーが大阪大学人間科学部で開催されました。関西圏を中心に広島や東京から、大学院生のほか学部生や助教職についている方の参加があり、延べ53名（一日目30名、二日目23名）でした。1日目は、近藤博之会長による挨拶に続き、参加者相互の自己紹介を行った後で、お茶の水女子大学名誉教授の箕浦康子先生の講演と、大阪大学教授の志水宏吉先生の講演がありました。「子どもと文化：私の研究史40年」と題された講演において、箕浦先生は、家裁の調査官として勤務していた時代の研究との関わりを前史とし、アメリカの大学院で学び始めてから今日までの研究活動を丁寧に振り返られました。心理学・人類学・社会学を自由に横断し、調査フィールドをロスアンゼルスから岡山県吉備高原、バングラデシュ、そしてタイへと大きく変えながら積み重ねてこられた数々の研究は、いま振り返れば、「社会変動のなかの子ども」というテーマと「子どもが育つ場の全体（学校と校外）」への関心によって貫かれていたとまとめられました。一方、「若手教育社会学者へのエール：研究と実践との関係性をめぐって」と題された志水先生の講演は、ご自身の研究の実践的な志向性の背後にあるとされる「大学第一世代」という個人史の語りから始められました。そして、ニューカマーや学力問題への取り組みを重ねながら、実践的な研究のあり方を「見る研究」から「動く研究」へと深めるとともに、「実践としての研究」や「冷たい知／あたたかい知」など、研究と実践との関係についての考察もまた深めてきたことが述べられました。さらに、近年では、新たに「共生学」という学問分野を立ち上げる試みを始めていることが紹介されました。その後の懇親会には講師の先生方3名や教育部スタッフを含む31名が参加し、熱い議論が交わされました。

2日目は、「研究力の向上を目指して」と題し、3つのグループに分かれてワークショップを開催しました。ファシリテーターは、日本女子大学准教授の荒牧草平先生、愛知教育大学講師の片山悠樹先生、早稲田大学助教の松岡亮二先生が務められました。荒牧先生は「量的研究を成功させるには」と題し、〈何を明らかにしたいのか〉と〈研究方法〉、〈結果の解釈〉の三つを一致させることの重要性を強調されました。片山先生は「研究テーマを展開する」と題し、分析対象や分析視角を変化させる具体的な方法を紹介されました。国際部との初めてのコラボレーション企画となった松岡先生のワークショップは「研究を国際発信する」と題し、事例の特異性よりも学問的な意義を示すことや、読み手の側の文脈に合わせることの重要性を強調されました。いずれのグループにおいても、参加者各自の研究関心に沿った話し合いや意見交換が意欲的になされました。その後、参加者が一堂に会して、各グル

ープでの話し合いの様子をお互いに紹介しあいました。最後に清水睦美教育部長から閉会の挨拶があり、2 日間の日程を無事終了しました。

受講後のアンケートでは、参加者の大半が「とてもよかった」と回答しています（28 名中 20 名）。自由記述欄には、「院生として先生方の研究歴を聞くのもなかなか貴重な機会なので、とても感動しました。そして励まされました。」「素晴らしい！のひとこと。内容のすべてにおいて、期待をはるかに超えるものを得ることができました。」など、多数のコメントが寄せられました。年度末の大変お忙しい時期にもかかわらず、本セミナーにご協力下さった先生方に厚く御礼申し上げます。

（教育部：堀健志・呉永鎬・坂口真康・知念渉・林明子）

第6回

日時：2018年3月24日～25日

場所：東京大学教育学部・教育学研究科

日本教育社会学会 第6回若手研究セミナー 開催のお知らせ

2018年1月6日

日本教育社会学会教育部長 山内乾史

日本教育社会学会では、教育社会科学研究の研鑽を積んでいる若手研究者を対象に、教育社会学の最新の知識の習得と参加者相互の新たなネットワークの構築を図ることを目的としたセミナーを、下記の要領で開催します。

- (1) 主 催 日本教育社会学会
- (2) 日 時 平成30年3月24日(土) 13時～3月25日(日) 15時40分
- (3) 場 所 東京大学教育学部・教育学研究科
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
(地下鉄丸ノ内線・大江戸線 本郷三丁目駅 下車 徒歩約10分
地下鉄「千代田線」湯島駅 下車 徒歩約12分
地下鉄「南北線」東大前駅 下車 徒歩約15分)
- (4) 参加対象 大学院生または若手研究者で教育社会学に関心のある方(非学会員も可)
- (5) 定 員 50名(定員になり次第、締め切り)
- (6) 参 加 費 1,500円(当日支払い)
参加費は、資料冊子の印刷費及び通信費等に充当します。交通費・宿泊費につきましては、各自でご準備ください。
1日目終了後、懇親会を開催します。参加希望者は3,500円を別途ご用意下さい。
- (7) プログラム 別紙1の通り
- (8) 申込方法 参加をご希望の方は、申し込み期間内に、お申込みフォームに必要事項を記入して送信してください。
お申込みフォーム：<https://goo.gl/forms/gRH6lNdxC3FmNa2w2>
 - 〈必要事項〉 ①氏名、②フリガナ、③所属(大学院生は学年も)、④学会員か非会員かの別、⑤メールアドレス、⑥電話番号、⑦研究テーマ、⑧参加を希望するワークショップ、⑨懇親会参加の有無を記入して下さい。あらためて、担当者より確認の連絡と事前準備ワークシートをお送りします。
 - 〈受付期間〉 平成30年1月15日(月)～2月28日(水)
 - 〈事前準備〉 参加される方は、別紙2に示した事前準備をお願いします。
- (9) 問い合わせ 【日本教育社会学会第6回若手研究セミナー】(担当：高橋)
E-Mail：jses.seminar.2017.18@gmail.com
- (10) 共 催 東京大学大学院教育学研究科 北村友人研究室

(別紙1) 第6回若手研究セミナー プログラム

日	時 間	内 容
3 月 24 日	12:30 ～ 13:00	受 付
	13:00 ～ 14:00	開会挨拶 山内乾史 教育部長 参加者自己紹介、ワークショップ準備
	14:00 ～ 15:00	講演1 オックスフォード大学 ニッサン日本研究所・社会学部 教授 荻谷剛彦「日本（社会）という問題ーバウンダリーを超えて」
	15:00 ～ 15:20	休 憩
	15:20 ～ 17:00	質疑応答・ディスカッション 司会：北村友人 教育部副部長
	17:30 ～ 19:30	懇親会
3 月 25 日	10:00 ～ 11:30	<u>ワークショップー研究力の向上を目指して</u> 3つのテーマ別グループに分かれてグループワーク 1 言説／テキストを分析するとはどういうことか ファシリテーター：仁平典宏（東京大学教育学研究科 准教授） 2 質的な調査と分析の方法に関する科目」をどう教えるか ファシリテーター：結城恵（群馬大学大学教育・学生支援機構 大学教育センター 教授） 3 海外での調査・国際共同研究 ファシリテーター 丸山英樹（上智大学グローバル教育センター 准教授）
	11:30 ～ 12:40	昼 食
	12:40 ～ 14:10	ワークショップの続き
	14:10 ～ 14:30	休憩
	14:30 ～ 15:20	全体での振り返り
	15:20 ～ 15:40	閉会式
		参加者アンケート

※参加者事前準備

別紙2「第6回若手研究セミナー ワorkshop一覧」の「事前準備」欄の指示に従い、参加申し込み後に別途お送りするワークシートに、必要事項を記入の上、平成30年3月9日（金）までに【日本教育社会学会第6回若手研究セミナー】(jses.seminar.2017.18@gmail.com)までお送り下さい。

(別紙2) 第6回若手研究セミナー ワークショップ一覧

[内容に関して未定のところがありますが、追ってさらなる詳細をご連絡致します。]

ワークショップ1	テーマ	言説／テキストを分析するとはどういうことか
	ファシリテーター	仁平典宏（東京大学教育学研究科 准教授）
	内容	言説や文字データを用いた研究は増えていますが、それが依拠する方法論／理論は、構築主義やフーコー的言説分析から、自然言語処理を用いたテキストマイニングに至るまで、多岐にわたっています。その中で査読においては、知見の新規性はもちろん、分析の手続きや前提が厳しく問われます。 自らの前提を問い直しつつ、それぞれの方法的課題と対処するための方向性を、一緒に考えたいと思います。
ワークショップ2	事前準備	①リサーチクエストと用いる資料（まだ分析していなくても可） ②言説を扱う上で、いかなる理論的・方法的立場に立っていますか？もしあれば書いて下さい。参考になっている先行研究があれば、合わせて挙げて下さい。 ③言説といわゆる「実態」との関係について、どのように考えていますか？もしくは、どんな仮定を置いていますか？（分からなければイメージでも結構です） ④対象とする言説資料と言説空間「全体」との関係について、どのように考えていますか？その資料から「一般的なこと」を言うために、どんな手続きが必要だと思いますか？（思いつきでも結構です） ⑤研究をすすめる上で、どのような課題や悩みがありますか？
	テーマ	「質的な調査と分析の方法に関する科目」をどう教えるか
	ファシリテーター	結城恵（群馬大学大学教育・学生支援機構 大学教育センター 教授）
ワークショップ3	内容	社会調査士資格取得のために必要となるカリキュラムのうち、「【F】 質的な調査と分析の方法に関する科目」（90分×15回）を担当することになった場合に、授業づくりをどのように進めていくかを考えます。参加者の経験のなかから得られた知見や創意工夫を共有し、意見交換しながら、効果的な教育のあり方を模索していきたいと思います。参加要件は、質的研究に対する関心や経験があることとし、該当科目の担当経験の有無は問いません。
	事前準備	「【F】 質的な調査と分析の方法に関する科目」（90分×15回）について、担当経験のある参加者は過去の経験／担当経験のない参加者は自らの質的研究の経験から、次の2点をご準備ください。 1. 質的な調査と分析の方法を教えるときの試行錯誤 (1) 指導に苦労した点／苦労すると想定される点と、(2)その経験から創意工夫をした点と／創意工夫をしてみたい点と、(3)その効果の実際／想定される効果について、具体的なエピソードもとに説明できるように準備をしておいてください。 2. 科目【F】を担当する場合のシラバス 上記1での検討事項も反映したシラバスを作成してください。 シラバスには、(1)目的 (2)到達目標 (3)授業の構成（15回分の構成） (4)各回の内容、(5)授業方法 (6)学習者への評価の観点と基準 (7)指導者の自己点検の方法について記しておいてください。

ワークショップ3については次ページをご覧ください。

ワークショップ3	テーマ	海外での調査・国際共同研究
	ファシリテーター	丸山英樹（上智大学グローバル教育センター 准教授）
	内容	ここでは、海外調査と国際共同研究の2つを扱う。海外調査は準備によって成果が分かれることが多く、国際共同研究ではコミュニケーションや人間関係が重要になることもある。日々の研究者としての準備がそのまま結果につながることもあり、本ワークショップでは、参加者の経験や工夫を共有し、各自の課題を捉え直す機会としたい。
	事前準備	I) 海外調査の実施において、ご経験・期待・不安などを記してください。 II) 国際共同研究 (A)政府系機関による調査研究 (B)多国籍チームによる研究 III) 海外調査に向けて毎日の準備 IV) テーマ・内容に関連する意見や悩みなど

※事前準備については、参加申込み後、別途お送りするワークシートに、希望するワークショップで指示された内容を書いてご準備ください。

第6回若手研究セミナーの報告

第6回の若手研究セミナーは3月24日（土）、25日（日）両日に東京大学本郷キャンパスの小島ホールで開催されました。中心になって作業を進められたのは教育部の副部長である北村友人先生と部員である高橋史子先生です。

初日はオックスフォード大学の荻谷剛彦先生をお招きして「日本（社会）という問題——バウンダリーを超えて」というタイトルでお話をしていただきました。荻谷先生の方から、若い方々とじっくり語り合いたいというご要望をあらかじめ出していただいていたので、今年度は、講演者は荻谷先生お一人のみとし、たっぷり質疑応答の時間を取らせていただきました。『日本の教育社会学』というムラ社会の外へ飛び出ることの意味と意義（そしてご苦労）について、荻谷先生の御経験に基づく貴重なお話を披露していただきました。講演は、荻谷先生から参加者への「あなたの専門は何ですか？」という質問から始まりました。荻谷先生は、参加者各々が回答を用意するにあたって想定する集団を「準拠集団（referencegroup）」と呼び、その集団と他者との境界を自らが設定する「バウンダリー」であるとされました。例えば、研究論文を執筆する際に必ず行われる先行研究のレビューは、ある準拠集団を想定して整理されるものですし、研究知見を発信する場合も同様であるわけです。そこから発展して、おそらく参加者の多くが前提としている準拠集団である「日本（社会）」というバウンダリーについて、研究及び論文執筆の言語や、方法、投稿ジャーナル等の選択が、翻って研究にどのように影響しているかについて参加者と議論を交わされました。単に日本語で書かれたものを英語に直せば通用するかといえばそうではなく、暗黙の前提となっている思考のパターンや概念のずれなどを丁寧に汲み取った上で、

「日本（社会）」というバウンダリーを超えてより広く学術的な貢献を示すためには、「日本（社会）」というバウンダリーの中に自分が無意識的に取り込まれていることを意識する必要があると指摘されました。例えば、なぜウェーバー、ブルデューのようにある分野を語るときに避けて通れないような学術的貢献をする研究者が日本人から出ないのか、という問いを考えることでもあると例を出しながら、単に日本で行っている研究を海外向け、あるいは英語で「発信」すれば済むということではないと述べられました。最後に、若手研究者とともにこれからの知の生産と蓄積について再考していきたいというメッセージで講演は締めくくられました。

北村副部長との質疑応答のやり取りの後、予定されていた休憩時間も取りやめて、3時間ぶっ通しで講演と質疑応答をさせていただくという、なんとも贅沢なセミナーになりました。

た。これから新たに研究者の道へ踏み出そうとしておられる若い方々、あるいは海外に活躍の場を見つけ出し踏み出そうとしておられる若い方々が 40 名参加していましたが、熱心な討議が行われ、その討議は東大近くの懇親会場に移った後も続きました。苅谷先生には三次会までたっぷりお付き合いいただき、若手の研究者の方々に大いに刺激を与えていただきました。

翌 25 日は三つのワークショップに分かれて熱心にインタラクティブなディスカッションを行いました。第一のワークショップが東京大学の仁平典宏先生による「言説／テキストを分析するとはどういうことか」、第二のワークショップが群馬大学の結城恵先生による「『質的な調査と分析の方法に関する科目』をどう教えるか」、第三のワークショップが上智大学の丸山英樹先生による「海外での調査・国際共同研究」です。

ワークショップ 1 においては、午前は、主に事前課題に即する形で、文字データを扱う研究が依って立つ方法論的・理論的立場について講義がなされました。特に、それらの研究の中でも様々な立場があることが強調され、それ故に研究目的・問いや資料との整合性に鑑みながら自身の立場について自覚的であることの重要性が説かれました。午後は、仁平先生が提示されたデータに即してグループ・ワークが行われました。具体的には、「いじめ」を扱う新聞記事の見出しと内容の変遷から、「いじめ」の変化について考えるというものでした。ワークショップ 2 においては、午前は、各参加者が質的調査についてわからないことをポストイットにキーワードで書き出し、それらをカテゴリ化した上で、発表するというワークを行いました。午後は、事前に提出したワークシートの内容を基に、結城先生がこれまでに担当された授業の具体的な事例を混じえて議論が進められました。参加者が質的調査と分析の方法を教える上で悩んでいる点にはどのような暗黙の前提があるか、質的調査の技術を教えることと理論を教えることのバランス、何のためにその技術を教えるのかということを意識的に教えることの重要性、学習者に学び取ってほしいエッセンスをまず体験させてから、文献で知識を得、宿題で実践するという教授プロセス等、参加者が質的調査法を授業で担当する際に考えるべきさまざまな点が指摘されました。さらに、質的調査法の授業を担当する教員どうしで互いの授業方法について情報交換や議論を行えるような FD の機会を設けるというご提案を頂きました。ワークショップ 3 においては、午前は、参加者の自己紹介ならびに丸山先生による講義がありました。午後は、午前の講義と事前課題を踏まえ、参加者からの質疑応答が行われました。丸山先生の講義内容は、「フィールド調査では、長所を生かし、相手との信頼関係を築きながら、研究を進めていくこと」をテーマとして、国内外におけるフィールド調査の詳細な方法論についてのものでした。また、これらの

講義から、調査のみならず、研究では「自分の研究の立ち位置を把握し、外部に対してアピールする」ことの重要性を説かれていました。

3名の先生それぞれが個性を生かし、熱心に討議をしていただき、大変有意義なワークショップだったと思います。最後に全体会を開き、各ワークショップの報告があり、北村先生が総括されました。

(教育部長：山内乾史)

第7回

日時：2019年3月16日～17日

場所：関西国際大学尼崎キャンパス

日本教育社会学会 第7回若手研究セミナー 開催のお知らせ

2019年2月14日

日本教育社会学会教育部長 山内乾史

日本教育社会学会では、教育社会科学研究の研鑽を積んでいる若手研究者を対象に、教育社会学の最新の知識の習得と参加者相互の新たなネットワークの構築を図ることを目的としたセミナーを、下記の要領で開催します。

- (1) 主 催 日本教育社会学会
- (2) 日 時 平成31年3月16日(土) 13時 ～ 3月17日(日) 15時40分
- (3) 場 所 関西国際大学尼崎キャンパス
〒661-0976 兵庫県尼崎市潮江1丁目3番23号
(JR神戸線・東西線 尼崎駅 下車 徒歩約5分)
- (4) 参加対象 大学院生または若手研究者で教育社会学に関心のある方(非学会員も可)
- (5) 定 員 50名(定員になり次第、締め切り)
- (6) 参 加 費 1,500円(当日支払い)
参加費は、資料冊子の印刷費及び通信費等に充当します。交通費・宿泊費につきましては、各自でご準備ください。
1日目終了後、懇親会をホテルヴィスキオ尼崎(JR尼崎駅付近)にて開催します。
参加希望者は4,000円を別途ご用意下さい。
- (7) プログラム 別紙1の通り
- (8) 申込方法 参加をご希望の方は、申し込み期間内に、下記メールアドレスに必要事項を記入して送信してください。後日こちらから申し込みフォームを連絡させていただきます。
申し込みメールアドレス：hara@bukkyo-u.ac.jp(教育部副部長・原清治(佛教大学))
〈必要事項〉 ①氏名、②フリガナ、③所属(大学院生は学年も)、④学会員か非会員かの別、⑤メールアドレス、⑥電話番号、⑦研究テーマ、⑧16日講演会参加の有無、⑨講演後の懇親会参加の有無、⑩17日実施の参加を希望するワークショップを記入して下さい。
あらためて、担当者より確認の連絡と事前準備ワークシートをお送りします。
〈受付期間〉 平成31年2月14日(木) ～ 2月28日(木)
〈事前準備〉 参加される方は、別紙2に示した事前準備をお願いします。
- (9) 問い合わせ
【日本教育社会学会第7回若手研究セミナー】(担当：教育部副部長・原清治)
E-Mail：hara@bukkyo-u.ac.jp
- (10) 共催 関西国際大学

(別紙1) 第7回若手研究セミナー プログラム

日	時 間	内 容
3 月 16 日	12:30 ～ 13:00	受 付
	13:00 ～ 14:00	開会挨拶 山内乾史 教育部長 参加者自己紹介、ワークショップ準備
	14:00 ～ 15:00	講演1 お茶の水女子大学・名誉教授 宮島喬 「近代的公教育における平等と不平等、再生産 ーデュルケム、ブルデューから学び、考えたことー」
	15:00 ～ 15:20	休 憩
	15:20 ～ 15:35	討論者 白鳥義彦 神戸大学大学院人文学研究科・教授
	15:35 ～ 17:00	質疑応答・ディスカッション 司会：北村友人 教育部副部長
	17:30 ～ 19:30	懇親会 ホテルヴィスキオ尼崎 (https://www.hotelvischio-amagasaki.jp/)
3 月 17 日	10:00 ～ 11:30	<u>ワークショップ</u> 3つのテーマ別グループに分かれてグループワーク 1 個人化する社会の社会学 ファシリテーター：堀家由妃代（佛教大学教育学部 准教授） 2 オリジナリティを高める ファシリテーター：内田良（名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 准教授） 3 持続可能な長期的研究計画を構想する ファシリテーター：相澤真一（中京大学現代社会学部 准教授）
	11:30 ～ 12:40	昼 食
	12:40 ～ 14:10	ワークショップの続き
	14:10 ～ 14:30	休憩
	14:30 ～ 15:20	全体での振り返り
	15:20 ～ 15:40	閉会式
		参加者アンケート

※参加者事前準備

別紙2「第7回若手研究セミナー ワorkshop一覧」の「事前準備」欄の指示に従い、参加申し込み後に別途お送りするワークシートに、必要事項を記入の上、平成 31 年 3 月 8 日（金）までに hara@bukkyo-u.ac.jp までお送り下さい。

(別紙2) 第7回若手研究セミナー ワークショップ一覧

ワークショップ1	テーマ	個人化する社会の社会学
	ファシリテーター	堀家由妃代（佛教大学教育学部 准教授）
	内容	日本の教育社会学はこれまで多くの教育課題に挑戦してきたが、世の中はますます「個人化」の方向にある。 1) 従来教育社会学が取り扱ってきたテーマの個人化：いじめや不登校問題は依然として当事者の「心」に焦点化され続け、学力問題に至っては「非認知スキルの育成」により、ハイパーメリトクラシーが加速する傾向にある。 2) 比較的新しいトピックの個人化：障害者問題、性の多様性などについて社会学からのアプローチはあるが、依然として「個人の身体の中」の問題とされる傾向にある。
	事前準備	1) 2) のような問題について示唆的な論文を持ち寄り、共有したい。1) については、これまでの教育社会学研究の蓄積をより現代的な文脈で読み解くことができるような論考の準備を、2) については、国内外の最新の情報を紹介できるように資料を用意してください。各自がそれぞれを簡単に紹介するイメージを持って臨んでください。
ワークショップ2	テーマ	オリジナリティを高める：テーマ，調査対象・資料，情報発信
	ファシリテーター	内田 良（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授）
	内容	学術研究においては、高いオリジナリティが求められます。そのために、1) どのようにして研究テーマを設定すべきか、2) どのような調査対象者や資料を選定すべきか、3) 情報発信をどのようにして活用すべきか、の3つの側面を検討します。 またその際には、研究遂行上のリソースをそれほど多く有していない立場を想定し、その少ないリソースのなかでオリジナリティを高められるような実現可能性（低コストな研究遂行の方法）も追究します。
	事前準備	1)～3) のいずれかに関して、オリジナリティを高めることに成功していると思われる論考を探しだし、少なくとも1本は簡潔に口頭等で紹介できるよう準備してください。ワークショップでは、参加者各自がその論考の魅力を紹介し、自分自身の研究の方向性を探っていきます。
ワークショップ3	テーマ	持続可能な長期的研究計画を構想する
	ファシリテーター	相澤真一（中京大学現代社会学部 准教授）
	内容	博士論文を短期間で執筆するように求められ、研究成果を急がせられる傾向は年々強まっている。一方で、長く研究を続けていくためには、中長期的なプランのなかで、個人・共同研究の可能性を含めながら、優先順位をつけながら研究を進めていくことが求められていくであろう。そのプランニングの一助になるようなワークショップを企画する。
	事前準備	次のような問いをワークシートに記入してもらおう。 ・博士論文のテーマをどのように決めたか？ ・院生時代に、博士論文で選んだテーマ以外にどのような研究を構想したことがあるか？ ・博士論文を書いているうちに、どのようなテーマに興味を持ったか？ ・そもそもどういう研究をしてみたくて大学院に入ったか？

※事前準備については、参加申込み後、別途お送りするワークシートに、希望するワークショップで指示された内容を書いてご準備ください。

第7回若手研究セミナーの報告

第7回の若手研究セミナーは3月16日(土)、17日(日)両日に関西国際大学尼崎キャンパスで開催されました。出席はおおむね20名でした。中心になって作業を進められたのは教育部の副部長である原清治先生、北村友人先生と、開催校教員であり部員でもある川村光先生です。

初日はお茶の水女子大学名誉教授の宮島喬先生をお招きして「近代的公教育における平等と不平等、再生産—デュルケム、ブルデューから学び、考えたこと—」というタイトルでお話をいただきました。また、コメンテーターには白鳥義彦先生(神戸大学)をお招きしました。

宮島先生からはまず、「デュルケムはどのような教育改革の課題に直面していたか」というテーマについて、「対カトリック教権」、「対反ユダヤ主義」という観点からお話いただきました。さらに「フランスの公教育の二つのパラドクス—日本ではどれだけ意識されているか」と題して、「無償化はベターな政策、しかし問題を解決するかどうか」、「『ライシテ』は平等か」という観点からお話いただきました。さらにブルデューに話が移り、「ブルデューの文化的再生産論は、この問題にどう切り込んだのか」について、宮島先生御自身がピエール・ブルデューの来日時に交わされた議論を紹介していただきました。さらには『文化資本』、『社会資本』のコンセプトがなぜ重要か、どう役立つのか、「在日外国人の子どもたちの高校進学今案の問題に寄せて」と、現在の問題関心についてもお話いただきました。長年にわたる豊富な調査経験と理論研究とを絶妙にミックスしたご講演は大変興味深いものでした。その後、白鳥先生のコメントを交えて、フロアとの活発な討論がなされました。懇親会は、宮島先生、白鳥先生、さらには開催校の濱名篤理事長・学長を含めて14名で行われました。

第二日日は三つのワークショップに分かれて熱心にインタラクティブなディスカッションを行いました。ワークショップ1では「個人化する社会の社会学」と題して堀家由妃代先生(佛教大学)がファシリテーターを務められました。まず、堀家先生による今回のテーマの説明がなされました。さらにマイノリティの課題などが「個人の身体の中」の問題として取り扱われ、問題が個人化されていることを述べられました。その後、院生による自身のテーマの紹介がなされ、被差別部落出身者や増加するニューカマー(ベトナム人やネパール人)はどのように異化されているか、橋と扉のメタファーでマジョリティとマイノリティが検討できるのかということについて議論がなされました。

ワークショップ 2 においては、「オリジナリティを高める」と題して、内田良先生（名古屋大学）から、これまでなされていない研究やいま話題になりつつある課題を探ること、2 次的データを有効に利用したり、情報が手に入りやすいネットを利用して「声なき声に近づける」研究方法など、先生のこれまでのご経験に基づいた議論が進められました。午後は、各参加者がオリジナリティを高めることに成功していると思う論稿を紹介し、内田先生と参加者の間で論稿の独自性を議論しました。そして、今後研究者として道を拓くためには、専門性を発揮しながらも汎用性のあるテーマを意識して情報発信していくことの重要性が示されました。

ワークショップ 3 においては「持続可能な長期的研究計画を構想する」と題して、相澤真一先生（中京大学）を中心に、午前は、修士論文、博士論文を書き上げるべき最も重要なことは何かについて議論がなされました。相澤先生からは、論文執筆、調査分析の手続きに関して一定水準以上の技量を身に付けることが求められる修士論文に対して、博士論文は、単著として「研究の終わらせ方を知ること」の重要性を説いていただきました。午後は、参加者が実際に取り組んでいる研究テーマを題材に議論がなされ、院生が研究を進める時の問題点として、評価される研究軸を適切に明示できていないことや、対象と方法が上手くマッチしない提案をしている可能性について指摘がなされました。午前、午後を通して、参加者各自の研究課題に沿って、意欲的な意見交換が行われました。

3 名の先生それぞれが個性を生かし、熱心に討議をしていただき、大変有意義なワークショップだったと思います。最後に全体会を開き、各ワークショップの報告があり、原先生が総括されました。

（教育部長：山内乾史）